

ダイバーシティ推進委員会 若手研究者・学生のための第5回ランチオンミーティング

ダイバーシティ推進委員会 藤本清彦

2018年3月14日、京都府立大学での第68回大会初日に京都府立大学下鴨キャンパス稲森記念会館104講義室にてランチオンミーティングを開催しました。ダイバーシティ推進委員会は多様な立場の方々の多様な形での学会参加を応援するための活動を行っています。ランチオンミーティングはそのような活動の中の一つで、今回で5回目の開催になりました。今回は、本学会男女共同参画担当理事の中山榮子氏からの基調講演の後、第1回優秀女子学生賞受賞者である京都工芸繊維大学の清水美智子氏と秋田県立大学高度木材加工研究所の工藤佳世氏に話題提供をいただきました。

中山榮子氏(日本木材学会男女共同参画担当理事、昭和女子大学教授)からは、「最近の男女共同参画におけるトピックス ～ガラスの天井から Unconscious Bias～」と題し、最近の男女共同参画についての話がありました。日本において、研究者に占める女性の割合は2005年が11.9%であったのに比べ2016年には14.7%と増えています。しかし、先進国の中で最下位です。国の政策としては、内閣府の男女共同参画推進会議が平成15年に202030と提案したように、2020年には指導的立場の人が30%になっているのが目標です。日本木材学会は、学生会員の女性比率は高いが、一般会員の女性比率は低いという状況です。学会としては学生会員がそのまま正会員となってもらえるようにしていきたいと考えており、その一つとして、優秀女子学生賞を設置しています。今年で4回目になるこの賞は、女子学生を後押しして木材学会の中で業績を積み上げてほしいという思いがこもっています。「ガラスの天井」という言葉があります。この言葉は男女を問わずマイノリティの地位向上を阻む壁のことです。一方、男性は収入や地位などと引き換えに「ガラスの地下室」に閉じ込められていると言われます。それぞれの人が正しく能力を評価され、活躍できる社会が必要です。最近では皆さん勉強してきていて、偏見を持つてはいけな分かって

いるのですが、無意識にしているのではないかというのが最近のトピックスです。「無意識のバイアス(偏見)」です。無意識の偏見とは、「シニアはパソコンが苦手」とか「インド人は数学が得意」のように無意識に偏見を持つてしまうことで、そのことがダイバーシティ推進の阻害要因となっていると言われています。一般的に人は「自分は良識を持っていて客観的に判断している」と思っていますが、

図1. 会告チラシ

実は知らない間にバイアスをかけています。人はみなバイアスを持っているということから皆さんと一緒に勉強していきたいと考えています。

清水美智子氏からは、「“女性+若手”研究者としてのこれまでとこれから」について話をいただきました。清水氏は大学ではフィールドワークの分野で、卒業後、民間企業に就職しました。その後、大学の博士課程に入り、修了する時に第 1 回の優秀女子学生賞を受賞しました。京都工芸繊維大学には女性教員の割合を



図 2. 会場の様子

改善するためのプログラムであるテニュアトラック制度で採用されました。京都工芸繊維大の若手の比率は 13.5%であり、全国平均 27.3%に比べかなり少ないと言えます。女性教員の比率は、増やしているのですが、それでも 15%で、理工系単科大学の女子学生割合が 25~27%であることを考えると少ないと感じています。これらの改善のためにテニュアトラック事業があります。これは若手研究者を採用し、しばらくは研究に専念してもらう制度で、産休や育休のときには期間を1年延長できるという仕組みや、研究や授業で補助員を雇うことができる制度もあります。「女性」であり「若手」である研究者として実感する利点と難点があります。利点としては女性限定採用があります。内閣府は女性の割合を30%にふやすという目標を設定しており、大企業や大学はその目標を見据えています。また、科研費の若手研究や財団等の年齢制限のある研究費では、比較的獲得しやすいと感じています。難点としては、採用時の女性限定などは逆差別ではないかと感じることがあります。これは現在が女性が活躍する社会への過渡期にあるためではないかと思います。若手としては、研究者として経験を積みたいが、大学の業務もあり、そのバランスが難しいと感じています。女性だから若手だからという現状は変えていきたいです。最近ではハラスメント対策が進んでいますし、特に研究という仕事は男性、女性という生物学的差異が出にくい業種だと思います。しかし、女性だとコツコツできるとか男性だから重いものを持てるという意識をつい持ってしまうので、まずはそこに気づいて、それからどうするかが大事です。今後、中堅になると、産休、育休、介護支援などライフイベントが変化します。裁量労働制なので対応しやすいとは思いますが、17時以降に会議や打ち合わせは行わないと決まっているにもかかわらず、実際には17時以降に会議があることもあります。これは全ての人が意識を変える必要があるということです。少数派に優しい社会は全ての人に優しい社会だと思います。誰でもいつどのようなきっかけで少数派になるか分かりません。全ての人に優しい社会はいつかの自分にとって優しい社会になるのだろうかという意識を持つようにしています。

工藤佳世氏からは、「孔圏道管と出会って 10 年～私のこれまでとこれから～」と題した講演がありました。孔圏道管とは環孔材において成長期のはじめ(春先)に形成される非常に大きな道管です。環孔材では春先に形成された道管のみが通水機能を持つため、この道管の形成が成長にとって非常に重要です。そこで、この孔圏道管が、いつ、どこから、どのように形成されるのか、形成

開始のシグナルは何か、大きさ、数ほどのように決まるのか、そのメカニズムを知ることを目的としてきました。学部と修士では信州大学で研究を行いました。卒論では「孔圏道管がいつできるのか」をテーマに試験を行い、樹幹の上部からできることを明らかにしました。いろいろなところでサンプリングを行いながら、樹木の成長の仕組み、樹木の生存戦略との関わりなどに疑問を持つようになりました。その中で研究者の方と出会いました。研究者方は疑問に対して熱く、そしてとても楽しそうに議論をしていました。その姿を見て「このようになりたい」と思い、東京農工大の博士課程に進みました。博士課程では、まず、低温走査型電子顕微鏡を用いて上部から通水が始まることを確認しました。次に、芽がなくても幹を温めるだけで孔圏道管が形成されることを、つまり、孔圏道管の形成開始のシグナルは気温の上昇であることを実験的に明らかにしました。大変なこともありますが、研究をとても楽しいと感じました。企業でのインターンシップでは工学部の学生と話し合い、研究者だからこそ社会に提案できることがあると感じました。いただいた優秀女子学生賞は研究を続けていくうえでの大きな励みになっています。その後、特任助教として秋田県立大学木材高度加工研究所に赴任しました。木高研では、鳥海山山体崩壊による埋没木の樹種識別と広葉樹における道管配列パターン形成の制御機構の解明に取り組みました。鳥海山は紀元前 466 年に山の形が変わるほどの山体崩壊が起きています。そのときの埋没木が高速道路の工事によって出てきているので、その樹種識別を行いました。樹種識別はやってみたい仕事でしたが、研究者、専門家として責任を感じる仕事でした。また、通水特性、材質特性に関係する道管配列がどのように形成されているのかをテーマとしました。その際、課題となったのが植物ホルモンです。まだ研究の途中ですが、植物ホルモンと形成層活動の関係の解明や組織構造を 3 次元的に理解することを始めています。研究を続けていくことはやはり大変なことだと感じています。就職先を探さなければならないし、研究費も獲得しないといけない、成果も出し続ける必要があります。一般の方向けの基礎講座などでは研究成果を発信することに責任をもって行わなければならないと感じています。でもそれだけでなく、新しいことに挑戦できたり、新しい結果が得られたり、違う分野の先生とディスカッションができたり、研究の重要性を再認識しています。今後も研究活動を続けていきたいと思います。孔圏道管の研究をもう少し続けたいと思っていますし、植物ホルモンの分布や動きの可視化にもチャレンジしたいと考えています。道管の配列パターンの形成機構に迫っていく研究をして、いずれは組織形成という観点から、樹木の成長戦略や生物としての意義に迫っていける研究を続けていきたいと考えています。

今回のランチョンミーティングは、会場が研究発表会場と同じ建物であったこともあり、かなり多く(110 名以上)の方に参加いただきました。参加者は学生、若手研究者からベテラン研究者まで幅広い方にご参加いただきました。参加者に無料で配布した軽食(ベーグルサンド)と飲み物も大好評で企画した委員会としてとても喜んでます。ベーグルサンドを用意していただいた協賛 2 社にはこの場を借りて御礼申し上げます。また、開催にあたっては関係各所に大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

次回の大会時にもランチョンミーティングを開催したいと考えています。来年も多くの皆さんの参加を心よりお待ちしております。